研究

徳山藩毛利家菩提寺　般若山大成寺の歴史

会員　栗﨑　健

大成寺プロローグ

建武四年（一三三七）花園法皇が、京都に関山慧玄を招いて開山した臨済宗最大の妙心寺派大本山正法山妙心寺がある。般若山大成寺（山口県周南市舞車町）はその妙心寺派の一等地一級紫衣寺である。現在、山口県内においては妙心寺派唯一の寺院である。

元亀三年（一五七二）織田信長と上杉謙信が対武田信玄で同盟を結んだ頃、まさに戦国時代、本州の西端、周防国富田村に潮音山南湘院（現山口市阿東徳佐上）という寺院があった。その南湘院のことが記された毛利輝元の覚書がある。

覚

本州龍文寺末寺富田邑　潮音山南湘院

輝元公御判物

周防国都濃郡富田保之内、南湘院海印寺東庄寺三ヶ寺住持職之事、任玄芳譲旨、寺家云寺領全執務勤行並寺役等堅固可相勤状如件

元亀三年十二月六日　　輝元　御判

また、南湘院寺社由来に、寛永二年（一六二五）徳山藩初代藩主毛利就隆は父輝元逝去後、公の為、御牌所を

富田に建立し、京都東福寺末寺とし、住職に西堂を招聘、**潮音山大成院**と号した、とある。住職西堂は大成寺に位牌がある『大成開山前聖福謹叔和尚瑃禅師』と思われる。

その後、寛文十年（一六七〇）就隆は徳山へ引取り、**聚福山大成寺**を再建立した。大成寺墓地に、『石窓禅師塔』と刻された時代を経た墓碑があり、本堂には『妙心第一座石窓立座元禅師』（延宝三年示寂）の位牌が納められていることから、石窓和尚が当時の住職であったと思われる。

延宝二年（一六七四）毛利輝元の五十回忌に、京都妙心寺の塔頭竜華院の竺印和尚を招いた。その際、就隆の菩提寺が未だなかったため、就隆が開基となり、竺印和尚を創建開山、関山派妙心寺末寺とし、ここを毛利家の菩提寺とした。現在の**般若山大成寺**の誕生である。

長州藩主一家に愛された開山竺印祖門和尚

都濃郡史に大成寺は「藩主毛利公の菩提寺にして伽藍の宏壮白亜の輪煥遠く之を望み街道の往復者嘆賞せざるものなかりし」とあるように、禅宗様式の七堂伽藍の揃った大寺院の誕生であった。

開山当時、延宝二年（一六七四）分限帳に『寺領高百石被下之外ニ高五石八斗六升寺禄被差除候事』とある。天保三年（一八三二）は百石切米五十石と寺社筆頭の寺領であり、時期は不明であるが石高二百五十石、家老に次ぐ上席であったという資料もある。

大成寺開山竺印和尚は明暦二年（一六五六）妙心寺龍華院を開山している。開基は長州藩初代藩主秀就（就隆の兄）の正室喜佐姫（徳川家康の孫）とも、喜佐姫の子、松平綱広ともいわれている。松平綱広は藩主秀就の四男で後の長州藩二代藩主毛利綱広である。龍華院の前身は徳昌庵といわれ、寛永年中、これも毛利家によって開基したものといわれている。喜佐姫の『法名龍昌院』からも推察される。しかし、妙心寺史においてはいずれの開基も不明確ということである。いずれにせよ、竺印和尚は長州藩主秀就一家に頗る外護されていた。竺印和尚の大法衣は秀就の長女登佐が寄付したものでもある。登佐

は伯父にあたる越前福井藩主松平忠直（家康の孫）の長男越後高田藩主松平光長の正室になっている。

竺印和尚は、また、長門生まれの長州人である。

徳川家康の曾孫、二世万休祖享和尚

竺印和尚、延宝五年（一六七七）九月没後、大成寺二世となったのが竺印の弟子、万休祖享和尚である。

江戸時代の禅宗寺院は、世襲、妻帯は許されず大本山妙心寺から、紫衣一等地寺にふさわしい僧が任命派遣された。万休和尚は喜佐姫の兄、越前福井藩主松平忠直の子である。

延宝六年（一六七八）十月、再三の要請に応え入院、すぐさま本書院に招かれ、元丸（後の徳山藩二代藩主元賢）様と御対顔された。小書院にて二汁七菜の御料理が出され、万休和尚は殿様、奥様、若殿様等へ扇子等の土産を持参した。また、殿様からは白銀三枚二種一荷の祝儀が出ている。

元禄五年（一六九二）六月二十七日病気により亡くなるまで、長き十四年間住職を務めあげた。

学問一筋に生きた学聖無著和尚

万休和尚と共に同時期、大成寺を支えたのが但馬国熊田姓、無著道忠和尚である。八歳で出家、竺印和尚の門弟となる。延宝六年から大成寺と本山妙心寺を往来、看坊役を担った。万休和尚没後も元禄六年（一六九三）九月次期住職が決定するまで大成寺に残籍し、入院を見届け帰京した。その際、白銀三枚、昆布一折の餞別をいただく。無著和尚は学聖と呼ばれ、学問一筋に生きた僧侶である。竺印和尚の跡を継ぎ、京都龍華院二世に就いている。妙心寺の住持にもなった偉才で、三百七十四種九百十一巻という数多くの著作を残した。

藩主元次、三世剣水和尚を追放

大成寺三世は剣水和尚という。宝永二年（一七〇五）隠居後、その弟子の加賀国出生の僧済首座が入院。大成寺四世北運和尚となる。しかし、その後、隠居剣水和尚

に禄が言い渡されたが、不服があったのか、一向に請けようとしないので、『これまでの厚忠を忘却、我侭の仕形』として藩主元次より以下の通り追放された。

『防州、長州、五畿内、紀州、尾州、武州、水戸、長崎　右之國之住居仕間敷候　一切寺持申間敷候也　酉十一月二十六日』

そして徳山藩奉行村上藤左衛門、新見弥七並びに組付四人、計六人が芸州、長州の国境小瀬川まで護送した。これにより当住北運和尚も退院を言い渡され、また、同宿の弟子たちも残らず退去することとなり、大成寺は無住寺となった。

この報を受けた京都龍華院は当院、退蔵院、東林院、福寿院、衡梅院より、使いの僧盆首座を早々に便船にておくり、北運長老を再び大成寺の住職へと願い出た。しかしながら、藩主元次は翌宝永三年（一七〇六）大成寺は妙心寺派から離れ、別派に改め曹洞宗龍文寺の末寺とする旨を妙心寺に通知、山号般若山、寺号洞春寺と改めた。大門の額字「般若山」はこの時、葉室一位頼孝卿が、また、その額板彫立の細工を陣僧頭山田真悦が仰せつかった。

龍文寺末寺般若山洞春寺はその後、正徳二年（一七一二）龍文寺末寺を断り、大本山永平寺の直末寺に変わった。変遷はすべて三代藩主元次の時代である。

享保九年（一七二四）還付があり、大成寺は妙心寺へ、南湘院は龍文寺の末寺へ、つまり宝永二年の剣水追放の事件以来、十九年ぶりに洞春寺から臨済宗妙心寺派大成寺に改号、復活したのである。そして北運和尚が再び住職として再建に努め、時代も藩主は五代広豊となり、毛利家の信用も取り戻していった。北運和尚の功績により、大成寺はその後ふたつの末寺を従え一層の権勢を誇った。末寺のひとつは城州越畑村霊源山福田寺であり、ひとつは、国司信濃守が禁門の変で責任を取らされ自刃した澄泉寺である。北運和尚は隠居後、澄泉寺に安住した。その澄泉寺が大成寺境内に描かれた明治四年（一八七一）の絵図が、今も大成寺に保存されている。澄泉寺はその後、荒廃していったが、明治三十六年（一九〇三）徳山

藩士であった矢嶋作郎（旧姓伊藤湊 電力事業の父・現在の東京電力の前身、東京電燈を創立）が徳山から下松東豊井宮ノ洲に移し、矢嶋家の菩提寺として再興した。但し、今はない。

長州周旋に尽力、勤王の外交僧石荘和尚

元治元年（一八六四）七月、長州藩は禁門の変により朝敵となり、第一次長州征伐がおこる。幕府の命により宇和島藩は周旋役となり、龍華山等覚寺十五世清崖慧覚を正使、金剛山大隆寺隠居晦巌韜谷を副使として徳山藩に遣わし、大成寺にて論議された。清崖は徳山藩士生田森衛の弟で大成寺に住したこともあり、大成寺で得度、蔵主恵淳と号した。しかし、この二僧による周旋はならず、宇和島帰藩。その後、長州藩を代表して徳山藩から宇和島藩に使者が遣わされた。徳山藩士桜井龍右衛門、同飯田信、そして大成寺住職石荘恵璉である。石荘和尚は本使として徳山藩主元蕃の書状を託されていた。宇和島藩の重要港である三机の地での会談は七度にも及んだが、石荘和尚は常に徳山藩の外交僧として大役を果たした。

禅界の傑僧十二世南天棒

大成寺十二世南天棒は中原鄧州、別号白崖窟という。明治二年（一八六九）三十一歳の時、初めて住持職についたのが、大成寺である。その後、全国の禅道場を巡り、無能と思えた修道者を容赦なく殴打したという近世禅界の傑僧である。師は常に南天の杖を持ち歩いていたので、南天棒と呼ばれた。奥州松島の瑞巌寺の住職にも就いた。南天棒は全国に幾千人もの信者があり、信者は居士大姉号を授かっていた。山岡鉄舟居士、児玉源太郎は藤園居士、乃木希典は石樵居士を授かっている。児玉、乃木との逸話は有名であるが、大成寺においても、豪放磊落な逸話を残している。

立派な黒漆塗りの箱が納められている二重の箱が大成寺に大切に保管されている。外箱の蓋の裏に次の如く墨書きされている。

『　般若山大成寺寺宝
開山傳法衣古金襴裁雑七條　弐肩
開山竺印大和尚受用物
茶色古麻二十五條袈裟　　弐肩
右　黒塗春慶　二重函入
　此函永々不許他用
維時明治三歳集庚午孟春初十日予普山開堂
之次謹受領這傳法衣也　…中略…
開山受用物也又頼有二重函閑却因方袍二肩
納置這裏者爾后来之児孫最厳密護持莫為等
閑會好至嘱　仝年仲春念四日般若山鄧州誌　』

南天棒は確かに「この箱を他の物入れに使うな。ここに開山和尚の傳法衣を受け継ぎ納めている。孫の代まで大切に守り続けよ」と記している。ところが、この寺宝は福川の豪商柏屋の子孫、福田雅正（つねただ）氏より、昨年、大成寺に届けられたものである。その謎は福田氏が出版された『福川柏屋　祖先記』に記されていた。

『徳山毛利家菩提寺大成寺の住職南天棒が、寺の家財什物を売物に出した時、相当数を引き受けた。袈裟筥（袈裟三肩）、衣筥（衣一、下着一）、雑品筥（白玉酒杯等六品）、蒔絵、硯筥、香盆、食器、絵画入板戸等である。』

南天棒の逸話がここにもあり、堀江一道大成寺現住職と思わず笑ってしまった。

しかし、福田氏のご厚情で寺宝が返ってきたのである（但し、中身は袈裟一肩のみ）。約三百五十年前の袈裟である。現在、本堂に竺印和尚の頂相（ちんそう）とともに飾られている。

廃仏毀釈により文化遺産損失

徳川幕府の大政奉還後、成立した新政府により、明治元年（一八六八）三月、『神仏分離令』が発令された。神道国教化により、いわゆる廃仏毀釈（はいぶつきしゃく）運動がおこった。明治以前、文久年間にすでにその兆候があり、徳山藩勤王志士は徳応寺、無量寺、善宗寺などの仏像等を破却している。

いよいよ寺の衰亡が始まった。大成寺は延宝二年（一六七四）開山以来、藩公菩提寺の為、毛利家先祖の

法要に終始してきた。当然家臣や町民の檀信徒は一家もなく、また、毛利家においては仏教から神道への転宗があり、菩提寺としての栄光を失い、明治四年（一八七一）の廃藩置県において、ついに食禄を失うこととなった。新政府の神仏分離令により大打撃を受けたのである。全国寺院においても堂塔伽藍が限りなく解体されていった。日本最大の文化遺産損失の廃仏毀釈であった。奈良の興福寺国宝五重塔さえ二束三文で売りに出されたという。

神仏分離令直後に大成寺住職に就いた彼の南天棒も不運かな、廃仏毀釈には叶わなかった訳である。

堀江家住職により大成寺中興

十二世南天棒の後、住職が入れ替わり続いたが、無住で荒れた時代が多かったようである。混乱が続いたのか十五世の住職は不明である。大正末期から昭和にかけて島原姓の僧が住職を務めた。まだ、二十代前半の若い僧であった。しかし、長続きはせず大成寺を諦め他寺へ移ってしまった。それから半世紀も経とうかという頃、先住十九世至道和尚の時、島原某がひょっこり大成寺を訪れた。あまりに立派な寺院になっているので驚き訪ねたそうである。話しを聞いた至道和尚は島原某を十七世泰邦和尚と認めた。泰邦和尚は平成二年（一九九〇）八十八歳の長寿を以て岡山県総社市天福寺にて示寂された。

泰邦和尚の後、大成寺を立て直したのが中興十八世達禅和尚である。広島県比婆郡生まれの堀江姓達禅和尚は、昭和三年（一九二八）同県世良郡福田寺より転寺、多年、苦心経営の努力が実り、また、各位の絶大なる協力のもと昭和三十六年（一九六一）現在の大成寺本堂の落慶を見る。そしてこれより堀江家世襲となり、岐陽中学校の教諭でもあった、先住至道和尚が昭和五十二年（一九七七）多年念願の禅堂、位牌堂、納骨堂、庫裡の完成を檀信徒各位の絶大なる物心両面の協力により達成した。そして現住職二十世一道和尚のますますの教化活動により、今日の大成寺の隆盛をみるに至っている。

また、徳山毛利家は今日まで脈々と引き継がれ、現在の当主第十四代毛利就慶氏は、大成寺の顧問である。

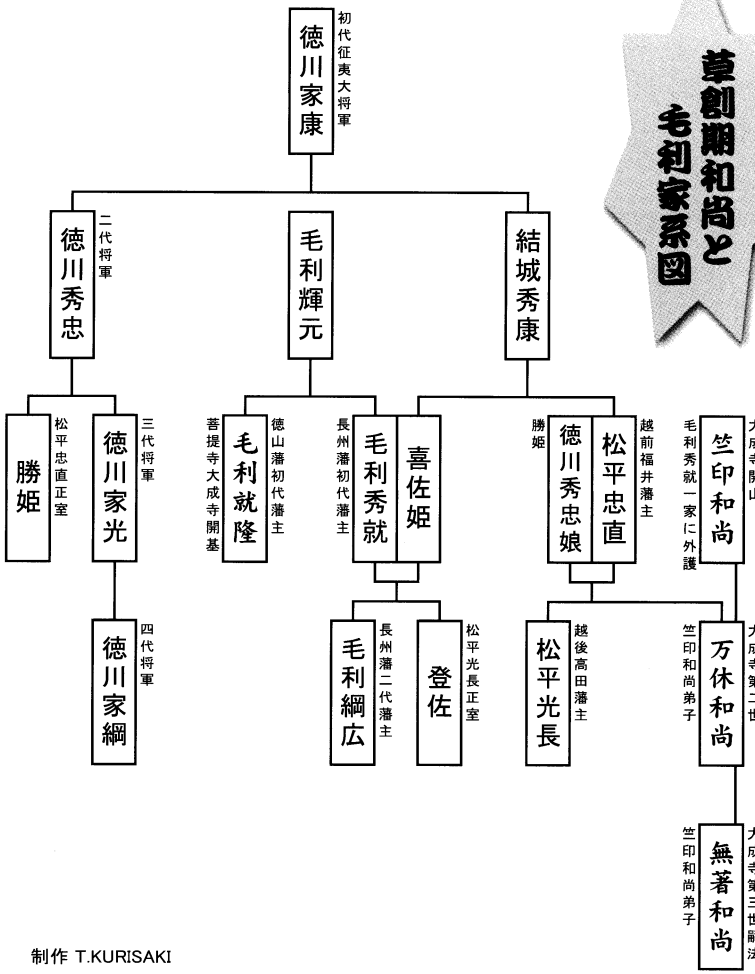
徳山毛利家墓所

徳山毛利家墓所は、大成寺の東側丘陵上に位置し、歴代徳山藩主、徳山毛利家当主、及びその妻子の墓約百基が祀られている。墓所の外周には、かつて土塀が廻っていたと考えられ、現在もその一部が残存している。昭和六十一年（一九八六）に「徳山藩祖毛利就隆夫婦の墓所」が市指定文化財に指定され、平成二十一年（二〇〇九）には墓所全体が城下町徳山の歴史を語る上で重要な史跡であることから、改めて「徳山毛利家墓所」として市指定文化財（史跡）に指定された。〈周南市教育委員会〉

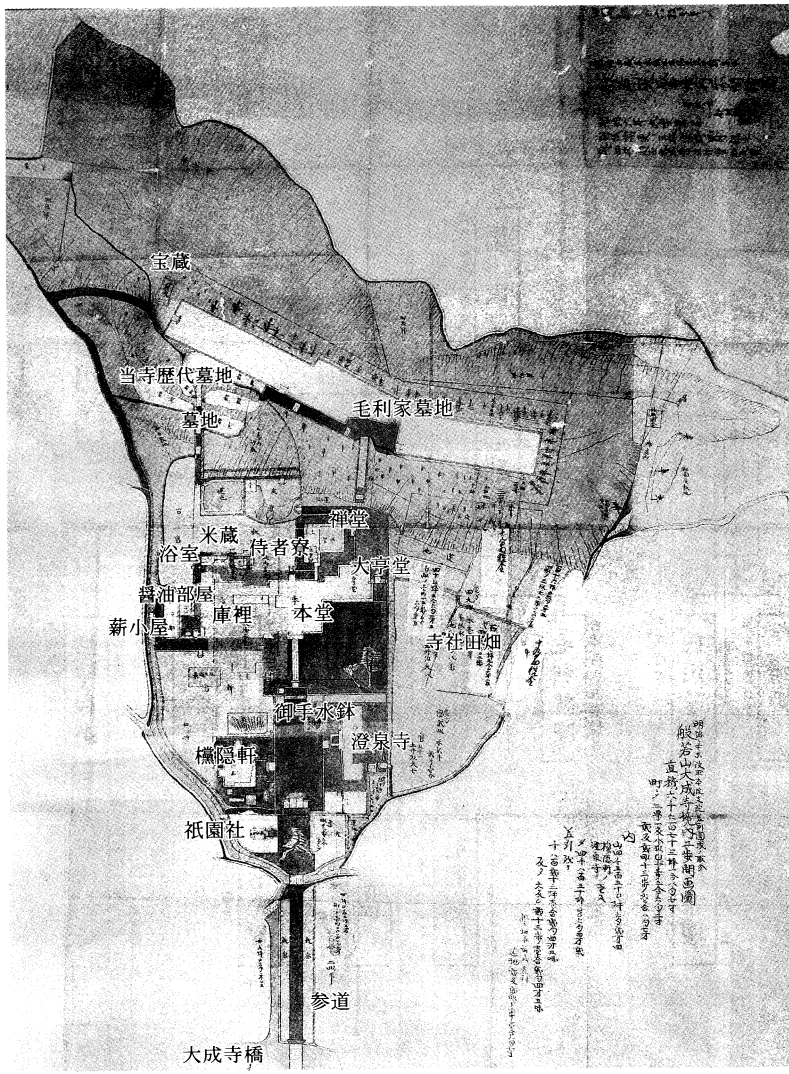
〔参考文献〕
徳山毛利家文書『大成寺録 寛永五年』山口県文書館
徳山毛利家文書『大成寺全録 自享保九年』山口県文書館
徳山毛利家文書『大成寺校割帳』山口県文書館
徳山毛利家文書『隠居遷化ニ付上使一件』山口県文書館
『三時回向』般若山大成寺殿司著（堀江至道）昭和五十一年
『妙心寺六五〇年の歩み』木村静雄著　昭和五十九年
『防長寺社由来 第七巻』山口県文書館
『福川柏屋 祖先記』福田雅正　平成二十五年
『雲水の一生』海清大楠窟編　昭和五十二年
『長州征伐と三机』三机村學事會　昭和八年
『都濃郡誌 全』山口県都濃郡役所　大正十三年
『徳山市史資料』徳山市史編纂委員会
『徳山市史』徳山市史編纂委員会

般若山大成寺〈周南市舞車町〉

草創期和尚と毛利家系図



制作 T.KURISAKI



『明治４年　般若山大成寺境内二歩間絵図　第十二世鄧州誌』

大成寺12世住職鄧州（南天棒）管理のもと、土地測量が行われ、『総面積六千六百七十三坪一合八勺七寸』、他内訳が詳細に記されている。また、『明治六年大変革に付、別紙図三枚追加、計四枚の図面を大成寺常住什宝に加える』とある。

臨済宗妙心寺派　般若山大成寺　歴代和尚

順	住職名	藩主 (当主)	入院 退院	西暦 西暦	和号生年月日 和号没年月日	備考
	曹洞宗南湘院 玄芳和尚	輝元	1572			龍文寺末寺富田潮音山南湘院 元亀3年(1572)輝元公覚書あり
	臨済宗大成院 前聖福謹叔和尚	1	(1625)			寛永2年(1625)就隆公、輝元公の為、富田南湘院に 富田御牌所建立、京都東福寺末寺とす、号大成院也
	臨済宗大成寺 石窓和尚	1	(1670)			寛文10年(1670)大成院徳山へ引き取り再建立号大成寺 妙心第一座石窓立座元禅師位牌並び墓碑あり
①	竺印大和尚	1	1674	1610	慶長14年	創建開山(延宝2年寺領高百石外高五石八斗六升)
			1677	1677	延宝5年9月30日	延宝2年(1674)初代徳山藩主毛利就隆招く/長州人
②	万休和尚	1～3	1678			延宝6年(1678)11月道号を万休とする/万休祖享和尚禅師
			1692	1692	元禄5年6月27日	松平忠直の子、毛利秀就の正室喜佐姫(松平忠直妹)の甥
	無著和尚	1～3	1678	1653	承応2年7月25日	龍華院二世/元禄6年(1693)まで大成寺に名記述あり
			1693	1744	延享元年12月23日	但州人/中興開山無著忠和尚大禅師/学聖と呼ばれる
	銀龍和尚	3	1693			元禄6年(1693)9月大阪出船徳山へ/初め欽龍
			1696			
③	剣水和尚	3	1696			宝永2年(1705)11月元次公に追放される
			1705	1720	享保5年5月8日	大成寺は曹洞宗龍文寺末寺洞春寺にかわる
④	北運和尚	3～5	1705			1706～1724般若山洞春寺となる/大成寺一時無住
			1733	1745	延享2年10月8日	剣水の弟子/金沢人/澄泉寺、城州福田寺を末寺とする
⑤	雪渓和尚	5				奥州人・雪渓祖梅和尚禅師
			1752	1753	宝暦3年12月14日	
⑥	環渓和尚	5～7	1752			宝暦2年(1752)10月11日大成寺後住環渓と記述あり
				1798	寛政10年7月20日	『大成寺隠居遷化ニ付上使一件』より/環渓祖席和尚禅師
⑦	独雄和尚	7	1781			遺稿『虚室詩草』二巻
			1796	1817	文化14年4月24日	独雄自在和尚禅師
	庸山和尚	7・8	1796			寛政8年(1796)同12年(1800)入院
			1803			
⑧	栄道和尚	8	1803			享和3年(1803)入院/栄道祖悦和尚禅師
			1817	1818	文政元年11月26日	
⑨	大方和尚	8	1817			文化14年(1817)轉位上京
			1820	1820	文政3年10月19日	大方廣和尚禅師
	瞬州和尚	8	(1836)			天保7年(1836)轉位上京、天保10年(1839)先住と記述あり
						100切50石天保3年(1832)筆頭寺社(分限帳より)
⑩	関龍和尚	9				関龍祖傳和尚禅師
			(1847)	1847	弘化4年12月10日	
⑪	興巖和尚	9				興巖禅堇和尚禅師
			(1863)	1863	文久3年正月28日	
	石荘和尚	9	(1863)			石荘恵璉/長州周旋為藩主元蕃の書状持参し宇和島三机へ
						宇和島金剛山大隆寺晦厳弟子、選仏寺住持後大成寺住持
⑫	南天棒和尚	9	1869	1839	天保10年4月3日	M2毛利元蕃招く。庫裏、禅道場開設/西宮・海清寺供養碑
				1925	大正14年2月12日	中原鄧州全忠　白崖窟/『南天棒行脚録』『南天棒禅話』
⑬	永保和尚	10				鋭州(『三時回向』より)/永保義範和尚大禅師
			(1900)	1900	明治33年2月5日	
⑭	玉田大和尚	11				玉田温大和尚禅師
⑮	不明	11				
⑯	悦道和尚	11				悦道樹和尚大禅師
			(1922)	1922	大正11年2月27日	
⑰	泰邦大和尚	11		1903	年令から逆算	1926年頃まで務めるがその後無住
			'26頃	1990	平成2年2月24日	泰邦聖老大和尚/岡山県総社市天福寺にて示寂
⑱	達禅和尚	11・12	1928	1886	年令から逆算	大成寺中興達禅興岳和尚大禅師/広島県比婆郡 堀江姓
			1965	1965	昭和40年12月18日	昭和3年5月入寺、同年本堂増改築、祇園社葬儀場新築
⑲	至道和尚	13	1965	1916	大正5年8月27日	至道至誠和尚大禅師/徳山市立岐陽中学校教諭
			2005	2005	平成17年10月2日	達禅長男、二男弘道、三男正道、四男則道、長女芳子
⑳	一道和尚	14	2005	1949	昭和24年4月18日	堀江一道/一道活泉和尚
						至道長男、長女国光千津子/一道長男祐道禅師